

主な記事

生化学の現段階	1頁
組合製糸に関する戦後の文献	4頁
ベツト上の計画	7頁
サ ロ ン	8頁

千曲會報

1956年9月1日

昭和31年9月1日発行

長野県上田市常八

信州大学繊維学部内

編集兼発行人 小山 長 雄

信州大学繊維学部内

発行所 社団法人千曲会

昭和31年6月18日第3種郵便物認可 毎月1日発行 定価1部15円

生化学の現段階

……日本学術会議中部地方区会議の際の講演……

6月23日繊維学部講堂に於て行わる

名古屋大学教授 江上 不二 夫

生化学の現段階というとは非常に広範囲な問題であつて、簡単にお話できるものでなく、又私の知識の及ぶ所でもない。そこで私はここでは基礎化学としての生化学に焦点を向けて、ごく大ざっぱにお話したいと思う。

生化学の目的は“生物の力を借りずに生物を作る、”ということにあると思う。すなわち、生物のすべての成分を明らかにして、この成分を作ることに成功し、合せてもとの生物を作ることに成功することが生化学の終局の目標であろう。

今から130年程前には生物を合成しているのは有機物であつて、これは生命力によつてのみ作られると考えていた。ところが、1828年にヴェーラーが有機物である尿素を合成して以来、次々と生物によつて作り出される有機物が人工的に作られるようになった。しかし未だ人間が生化学的に作ることでできない物も多くある。さて我々が作れるという段階にもいろいろある。

その1つは生物の力を借りずに作れるものである。例えば尿素やビタミンB1などである。ビタミンB1は以前鈴木梅太郎博士によつて米糠から作られたが、現在では石炭から合成されている。即ち生物の生産物を全く借りずに大量生産され、人間の幸福に役だつものを提供しているわけである。第2は生物の生産物を一部用いて作られるものである。例えば澱粉は1940年にユリが初めて人為的に作ることに成功して、ノーベル賞をもらったが、その頃は生きた物によつてのみ作られていた。しかし現在はそれが植物からとりだしたある物を使えば作れるようになってゐる。

即ち要言すれば、生化学の現段階には、(1)生物を用いて作り出せるもの、(2)生物からとり出した生命力を失つたものを用いて作れるもの、(3)生物に無関係のものから純粋に合成によつて作り出せるもの、の3つがあるといえよう。

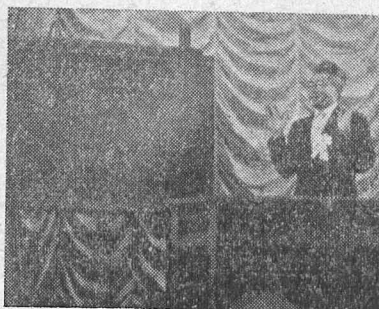
生物の生命現象は形而下には種々な形で現れている。例えば我々が歩行と喋ることとは異なる動作であるが、これを分析してみればそれが単なる筋肉運動として等しく理解される。では何がこの筋肉運動を起させるのか。その原因の追求も生

化学の命題に相異なる。我々の手や脚をとつてだんだんと小さくこわしていけば当然物質との限界に達する。この一步手前に於て単一に筋肉をとりだして電氣的刺激を与えるとそれは生きた動物のものと同様に運動する。現在この運動の源は筋肉を構成している蛋白質の中にあるアクトミオシンの分子が運動することによるといわれる。我々はこの単位迄の分子は運動させることができるが、これ以下の単位では運動させることはできない。

生命あるものの最も大きな特徴は“人間の子は人間である、”という特異性を持ち、かつその子孫を増殖していくことである。例えば人間に特異性がなければ人間の子は人間であるとは限らないから結局人間は絶えてしまうことになる。ではこの特異性を規定しているのは何か、また何が増殖しているかということになる。まずこの問題を理解するには最も簡単な生物から研究が発端する。その好例はビールス(Virus)であろう。ビールスは動物の病気ならばハシカ、小兒まひ、

桑ならば萎縮病などの原因となる。このうち特に研究されたのがタバコの葉についてタバコモザイク病を引きおこすビールスである。これはもちろん自己増殖をなし、生物の一種に違いないが、1935年にスタンレーによつて結晶状としてとり出され、物理的研究によつて純粋のものであることが確認された。そしてその結晶は核酸と蛋白質を含んでいることが判つた。一般の方々は蛋白質はよく御存知であるが、核酸については余りよく知っていない。その例としては私はこんな経験をもつている。

私はかつてNHKで朝の訪問を受けたことがあるが、その際アナウンサーが「先生は何を研究していますか」とたずねたので「私は核酸の研究をしていますよ」と答えた。すると彼は「核酸とは何ですか」ときいた。これには全く驚いた。アナウンサーともいわれる知識階級が核酸のごとき重大なものを知らないのに少しシヤクにさわつたので「核酸を知らないのですか。常識がないですね」とカツをいれてやつた。すると今度は「原子核に関係があるのですか」という有様であ



つた。原子核が問題になり始めた頃であるから無理もなかつたかもしれない。けれどそのあとで「核酸は繁殖力の旺盛のもの全てに含まれている」といつたら、それじやそれを是非食べなければいけませんね」ときいたのには全くあきれてしまった次第である。大切なものは食べなければだめだと一般的には考えていることをそのとき初めて知ったわけである。しかし実はそうではない。正反対である。生物にとって大切なものは食う必要がない位大切なものである。生物はそれにとって最も大切なものは体内で作れるようになっていく。食うものは重要度からいえば二の次であるといえる。その点ビタミンなどは不足すると栄養失調になるから教える必要があるわけである。核酸は結局重要な物質であるがため食う必要がなく従つてそれについて教えられもせず、自然なじみのうすいものとなつてしまった。

核酸は人によつて違つており、特異性がある。だから型の違う核酸をいくら食つてもだめであつて、又それで我々も安心していられるというものである。もし核酸が食えば補なえるとしたら我々はおちついて肉など食べられないことになる。

では核酸が生物の特異性を支配しているということはどうしたら判るか。生物の特異性は蛋白が主役を演ずる場合と核酸が示す場合と、この両者が一体となつて示す場合の3通りが考えられる。しかし蛋白質のみでは生物の特異性が現れないということは、すでに証明される。それで特異性はあとの2者が関係のあることが判る。子孫を生ずる過程の受精現象に関係している精子や卵子にはやはり核酸を有し、それは紫外線やX線を照射することによつて親と変つたものが現れてくることがある。これは突然変異 mutation とよばれるもので、生物の特異性を支配している物質が精子や卵子に存在している証拠である。ビーデル (Beadle 1947) によると、蛋白質と核酸とでは光学的に違いがあり、前者は280mμの紫外線をよく吸収する。一方核酸は260mμの光をよく吸収する。ところが実験の結果260mμという光が最も突然変異を起しやすいということが判つた。これは遺伝的な性質、すなわち生物の特異性の保存には核酸が重要な役割を持つているということを示している。

近頃微生物については抵抗性 resistance (ある方向をもつた) の問題が多く研究されている。始めになされたのが肺炎双球菌である。肺炎菌には40程もの型があつて、それらはⅡ型、S型とか、更にはⅠ型、Ⅱ型に分類されている。所が今より約10年前にRⅡ型の肺炎菌をSⅢ型に変えるのに成功した。これはRⅡ型にSⅢ型からとつたDNAという核酸を食わせたことによつて突然変異が起るという証明になる。DNAとは deoxyribo nucleic acid の略で、核酸には他にRNA (=ribo nucleic acid) があり、DNAは固定的なもので遺伝子の固定的な性格を支配し、それに対してRNAは変動的である。又染色体はこのDNAと蛋白質の一緒になつたもので、一般にはDNAは細胞分裂のときのみ変化が認められる。このようにRⅡ型からSⅢ型に変つたということは核酸が特異性を

支配しているという最初の直接的証明である。その後大腸菌インフルエンザ・ビールス等で非常によく研究された。

では、かかる核酸が人工的に作れるかという問題がある。タバコモザイク病ビールスは蛋白質の筒があつて、その中に核酸が入っているという構造である。けれども蛋白質が増殖するにはかならずこのような構造をしていなければならないのだろうか。これは現在の課題であつて、これについては昨年(1955年)パークレーのビールス研究所のフレンケル・コンラート (Frenkel Conrat) によつて研究がなされた。彼の研究はまづ稀いアルカリでこのビールスを処理すると核酸がこわれて蛋白質が残り、中性洗滌剤(何でもよいが彼はドデシール硫酸を用いた)で洗うと蛋白質が溶かされて核酸のみが残る。このようにしてできた各々ではビールスの役目はしない(即ち自己増殖はしない)が、これを中性液の中で混ぜるといろいろのビールスができる。このように両者を一緒にしたとき10%タバコモザイク病ビールスと同じようなものができた。デオレルは自己増殖をしない蛋白質の半合成に成功しているが、このことは自己増殖をするものの半合成に成功したのである。

タバコモザイク病ビールスにはいろいろの種類があるが、フレンケル・コンラートは半合成によつて変異体を作るのに成功した。その変異体性はどちらの性質をもつているかという点、核酸をもらつたものによつて、その性質ができるのである。この半合成のビールスを動物に注射すると動物には抗体ができる。結局抗原としての性質は蛋白質によるが、増殖したビールスの変異性は核酸によるということが判つた。

現在の生化学は次第に生命の本質に接近し、蛋白質においては生きたものは使わずに生きたものからとりだした物を使つて半合成できるようになつた。また核酸においても生きたものを使わずに化学構造的には核酸とみなされるものが作れるようになったし、又特異性を無視しては完全合成できるようになつた。この大学(信大繊維学部)の呉先生は既に蛋白質の半合成に成功されている。特異性のあるものも、この数年来完全合成のできるものもぞくぞく現れてきはじめている。又酵素作用を持つような蛋白質も作れるようになってきた。

基礎化学としての生化学の現段階は以上の通りであるが、これらが推し進められていくと細胞構造をもつた生物をも作れる段階に当然移つていくものと思われる。

(3頁よりつづく)

更に5月25日、6月26日に第2,3回の委員会を開き次の事項について協議した。

- (1)技術者派遣、研修生受入、蚕種、桑苗等の物資轉送の手続について
- (2)海外派遣技術者との連絡について
- (3)賠償に関する物資並びに役務に対する処理等について

以上が私の構想に対しての今日迄の進行状況である。

社団法人アジア協会

蚕糸業委員会の創立について

唐 沢 正 平 (蚕 2)

千曲会報第55号に「アジア蚕業技術開発協会と、日本シルク・センターの構想」を発表したところ、第57号に、神林、池田両氏の賛成の詞が載り、又、各方面から多数の賛辞を得ているから、其の後の経過を報告することが、私の責任でもあり、義務とも考へるので、貴重な紙面をかりて、茲に述べることとする。

私が去る一月末、アノ構想をハンフレットとして、友人知己に配付し「日本蚕糸業の行き詰った現状を打破し斜陽産業の汚名を拭い、再び蚕糸業を日本の重要産業とする途は、これ以外に無い」と強調すると、私の勢に圧されてか、誰も反駁したり反対する者が無い、皆賛成する。或る友人は「君に面と向つて、反対する人が無いから、皆賛成だと思ふのは人が好すぎる」と言う。然し、そう言う友人も、「趣旨は賛成だ、唯、金が要るが集めることが出来ぬぞ」と言う。正に其の通り、金が出来ぬから仕事にならぬと言ふのが大方の意見である。私は趣旨が良いと言ふ皆の賛成に励まされた。日本の蚕糸業を真に憂い、将来について考へる人が無い筈は無い何とかなるだらう、と日夜東奔西歩、長きは2,3時間に亘つて説明した。偶々社団法人アジア協会(会長藤山愛一郎氏)はアジア各国に、中小企業農業等の技術者を斡旋派遣しているから、同協会、事務局長、本位田祥男博士に会つて見る、と言う、好意的な忠告を4人から受けた。それで同博士に会つて見ると、非常に熱心に賛同され、更に同協会、農林委員会、委員長那須皓博士の御賛成及平塚、横山、両博士吉田中蚕会長等の熱心な御賛成を得て、茲にアジア協会に蚕糸業委員会を設置し、私の構想の前半、即ちアジア蚕業技術開発の事業をすることとなり、4月10日、丸の内、日本工業倶楽部で創立總會の第1回の委員会を開き、委員長は平塚英吉博士を煩わし、提唱した責任上私も委員となり、幹事長として今後、本委員会の運営にあたることになった。

即ち次にアジア協会蚕糸業委員会設置要項を掲げると

1. 趣 旨

アジア各国は蚕糸業の開発を熱心に希望しているが、絹が太古、アジアに発祥し広くアジア各地に普及したことを思えば現在、アジア各地に行われている養蚕は真に古い伝統を持っているものである。アジアの人々は今日絹に対して一種の憧れともいふべき、非常な関心を持つて居ることももつとも肯ける。

しかし、現在アジア各地に行われて居る養蚕技術の水準は決して高くない。一方、日本の蚕糸業に関する科学技術の水準は世界最高であり、また、近年、アジア各国から我国に蚕糸業技術者の派遣を要請するもの、または留学生の来るものが逐年増加して居る。

日本の技術者に依つてアジア各国の蚕糸業開発に協力することは、アジアの農業改良に貢献し、ただに、農民の生活向上、経済の安定に裨益するばかりでなく、人が接触することによつて、相互の理解を深め、親善友好を増し、ひいては経済提携の一環としての先驅的役割を果たす結果ともなる。

それゆゑ、このアジア各国の要請に応じて、技術者を送り

あるいは研修生を受け入れて教育訓練することは、アジア各国の経済開発と生活文化の向上に大いに貢献し得るものと信ずる。

ここにおいてアジア協会は、本協会内に蚕糸業委員会を設置して、

1, 各国の要請に応じて技術者を送り

2, 各国研修生の受入れ及其世話をはかるなど

日本の科学技術によるアジア蚕糸業の開発に協力するとともに、蚕糸業に関する重要問題につき調査、研究し、本委員会において得たる結論を、あるいは政府に建議し、あるいは民間団体に伝えて、官民協力のもとに最もすみやかなる具体化をはからんとするものである。

2. 事 業

本委員会は以上の目的を達成する為め次の事業を行う。

(1) アジア蚕糸業の発展に対する協力方策の調査、研究

(2) 協力方策の具体的実践に関する立案並びにその推進

(3) その他必要なる事項

3. 構 成

1. 委 員 会

委員は本会の理事、その他蚕糸業の権威者及本問題に関心を抱く識者の中より会長之を選任依嘱する。

委員長の選任は委員の中より会長之を依嘱する。

2. 幹 事 会

委員会に於ける審議事項を準備する為め幹事会を設ける。

幹事の選任、依嘱は委員会の議を経て会長之を行う。

幹事会に幹事長をおき会長之を依嘱する。

4. 委員及幹事

委 員 (順不同)

那 須 皓	(国際農友会会長)
平 塚 英 吉	(蚕糸科学研究所長)
吉 田 清 二	(中史蚕糸協会会長)
山 添 利 作	(農林漁業金融公庫總裁)
横 山 忠 雄	(蚕糸試験場長)
山 本 廉	(農林省大臣官房参事官)
永 野 正 二	(蚕糸局長)
有 賀 久 雄	(東京大学教授)
北 尾 淳一郎	(東京農工大学繊維学部部長)
合 田 修 一	(片倉工業株式会社社長)
波多野 林 一	(那尾製糸株式会社社長)
高 田 利 七	(日本製絲協会会長)
北 原 金 平	(全国養蚕農業協同組合連合会会長)
宮 沢 修 二	(全国蚕種協会会長)
唐 沢 正 平	(元日本蚕糸業会監事)
岩 田 喜 雄	(アジア協会副会長)
本位田 祥 男	(アジア協会事務局長)

幹 事

唐 沢 正 平	(元日本蚕糸業会監事)
大 村 清之助	(蚕糸局技術改良課長)
大 岩 鉦	(中央蚕糸協会情報部長)
玉 利 高 之	(全国養蚕農業協同組合連合会参事)
荒 木 喬	(全国蚕種協会主事)
宮 地 勝 彦	(アジア協会経済協力部長)
山 内 逸 次	(中央蚕糸協会主事)
青 柳 龍 郎	(日本製糸協会専務理事)

(2頁へつゞく)

組合製糸に関する戦後の文献

宮 下 久 吉 (筆32)

戦前における組合製糸の研究には数多くのものがあつた。即ち筆者等が作成した「蚕糸経済に関する文献集(蚕糸経済研究資料NO11 1953.11, 蚕糸局)」によれば、元母校教授故早川直潮博士著「組合製糸の理論と実際」を始めとして学者の著述になるもの9、(この中には平岡謹之助著蚕糸業経済の研究等蚕糸経済論の中に於て組合製糸の研究をしておるものを含まない) 全国産業組合製糸連合会等団体の編集になる資料10を数える。

戦后については、蚕糸経済の研究が戦前に比し全般的に立ち遅れている影響を受けて余り多数のものはない。而し農林省が昭和23年以来東大近藤教授に依頼して調査を始めてから今日迄に若干の文献が出現しつつある。順を追つて記すと、次のとおりである。(○印単行本その他は論文)

1. 組合製糸に関する史的考察

角 玄 (前農林省経済研究室長)
農業総合研究 第3巻第2号
昭和24.4.33—49頁 養賢堂発行

○2. 組合製糸の原価分析

八坂 筑紫 (東京農工大学助教授)
蚕糸経済研究会報告第12号
1954.6. B5版 22頁 外2表1—17

3. 組合製糸(上・下)

農林中央金庫調査部
農林金融 7巻 12月号, 1月号
昭和29.12.17—24頁 昭和30.1.32—39頁

○4. 組合製糸経営の実態調査報告(竜水社)

共著 近藤康男, 牧野玄之助 (東大農学部)
山根勝次, 小家 竜男 (東大農学部)
蚕糸経済研究資料NO12 1955.5
(蚕糸局技術改良課)

5. 組合製糸竜水社の調査

大槻正芳 農業総合研究 第10巻第1号
昭和31.1. 193—228頁

○6. 製糸業の変遷と組合製糸

小家竜男 (東大, 農学部)
協同組合経営研究所報告 第34号
1956.2. B5版 80頁

7. 組合製糸経営の分析(愛媛県東宇和蚕糸農協)

近藤康男 (東大教授)
共著 佐藤勝雄 (拓大助教授)
御園善博 (大阪府丘大助教授)
蚕糸経済研究連合会 195.6
B5版 231頁

以下主要なものについて簡単にその内容を紹介しよう。

1. 組合製糸の原価分析(八坂筑紫)

この研究は、組合製糸と営業製糸とを比較して、何れが経営能率が優秀であり、又優秀の原因如何という問題を製糸原価(加工費)と原料繭代との双方から研究したものである。(資料は昭和26年生糸加工費調査)

1. 加工費は組合製糸の方が1俵当り500円安い。理由は材料費

小なるためでこれは組合製糸はその附近の養蚕家の供繭に依存するから繭運搬費が小である。副収入は営業製糸が大であるため差引加工費は営業製糸の方が稍小である。

2. 組合製糸の原価

消費繭代は組合製糸の方が有利である。

原料繭副費も小であるが、支払利子は大きい。理由は資本構成上自己資本が小であり、資本の廻転率が小さいためである。

工場の経営能率は稍々良好であり、繰目も大で結局原価は小さい。

2. 組合製糸経営の実態調査報告(近藤康男外)

この調査は全国約30の組合製糸中その規模において天龍と並んで大きく、その経営成果に於て優秀な成績を示す竜水社について、その経営、労働、原料の三事情について分析したものである。

1. 経営事情において最も問題となる点は主として業務の運営と経営体の維持発展のための資本蓄積過程を把握することであり、それ故操業と資金操作の状況、収益状況、財務等について観察を加ふ次の分析結果を掲げている。

24年 25年 26年

(1) 運転率は 全国器械製糸平均 81.6 84.9 88.0
竜水社 93.3 98.5 97.8

これは本組合の優位性を示している。

(2) 加工販売費(昭和26年 1俵当り)

全国平均 63,874円
竜水社 50,903円

この差額が農家にどの程度還元されているかを見るために繭価を比較すれば

(3) 繭価(貫当り) 昭 26 昭 27
全国平均 1,504円 1,743円
竜水社 1,740 2,480

である。

(4) 総資本回転率を見れば昭和24年の2.44から昭和27年の3.42に上昇をたどり、総資本収益率も昭和24年の-0.48から昭和27年の1.07まで遽増しており、全様に自己資本収益率も-7.33から1.89に上昇している。

(5) 資本の状況も昭和24年から昭和27年までをみれば、出資金は8,174千円から79,926千円と 確実に払込まれており、準備金でも396千円から4,507千円までに到っている。積立金昭和26年60千円 27年3,351千円

(6) 但し借入金も相当に運用され、県信連から昭和24年の215百万円から昭和27年の645百万円と年々増大する。もつとも残高は117百万円から 90万円と減少しているから安定している。

(7) 流動比率も79から136に上昇すると共に 流動負債比率

は193(昭25)から77に低下している。

2. 竜水社の労働力の諸事情について、その実態を把握する意味で全従業員を対照としてアンケートを行った。特徴的点は

(1) 女子従業員の平均年齢は営業製糸に比して低く勤続年数は長い。

(2) 地区内町村より労働力の98%が供給されている。

(3) 従業員の実家の職業は70%が養蚕農家である。かつての組合製糸が100%養蚕農家の子弟によつて補充されていたのと異なる。

(4) 給与は他の繊維産業に比して低い。

3. 竜水社の原料繭政策は、原料繭改善施設費に示されているのでこれを中心に分析した。供繭は日と共に漸増傾向にあり原料繭政策として一貫しているのは、質的改善に意をそそぎ原種の品質統一を目標として遂行されていることがみられる。

4. 竜水社における原料繭をめぐる問題の所在を組合会の供繭が円滑に行われている美すゝ村と、抜売が相当行われている西筑輪村の2ヶ村の2部落の養蚕農家を調査し、両村の供繭の事情を比較研究することによつて明らかにしようとした。問題点次のとおり。

(1) 供繭を左右しているのは、養蚕農家の意識の相異、これを基礎づけているものとして、農業経営及び農家経済、組合の養蚕農家に対する宣伝活動の浸透の如何等である。

(2) 大製糸に対する抜売は見られない。抜売は仲買商によつて附近の都市の中小製糸に対して総量の7%程度がなされている。

(3) 農民と竜水社とは直接的な結びつきはないが、供繭不良の村でのみ竜水社に対する批判的な意見が多く見られる。

3. 製糸業の変遷と組合製糸 (小家竜男)

1. この報告は、蚕糸業一般に関する概説と組合製糸事業に関する2部から構成されている。

重点は組合製糸事業の分析であつて、蚕糸業に関する説明は組合製糸事業分析の理解に役立つ限りで述べである。

2. 蚕糸業概説の部分では、戦前の製糸業の変遷をごく簡単に述べ、次に戦后について蚕糸製造、養蚕、繭取引、製糸諸事情の回復の過程を見ている。

3. 組合製糸分析の部分では、はじめに組合製糸の沿革を観察し、さらに組合製糸事業の構造とくにその経済構造が考察されている。即ち次に続く組合経営の状況を分析検討するに際して前提としなければならない立脚点を究明している。

4. 戦后における組合製糸事業の状況を、製糸能力について繭収納状況、設備、生糸生産高によつてみると共に、包括的な観点から最近の資料によつて事業に投下されている資本ならびに資本構成について報告している。

本邦製糸業において組合製糸の製糸状況は、量的には戦前の位置と変化はない。質的方面から見て設備改善は比較的遅れている。資本構成、設備当り出資金額は平均よりも高額である。資本負債比率は1より小ではあつても、流動比率、

資本固定比率からみれば経営の運営は比較的健全である。

5. 組合製糸経営の分析では28年度の資料から、先に考察した立脚点に立つて、各組合製糸の事業成績を決定する要因を経営管理の面で捉えうる性質のものについて分析している。事業成績を対供繭支払可能掛目で評価し、これによつて表される成績を良好ならしめているものは製造販売費の節約に表現されるように、結局事業管理が良好に実施されるかどうかにかゝっている。

4. 組合製糸経営の分析 (近藤康男外)

この調査は農林省の研究費による第2年目の調査であり愛媛県東宇和蚕糸農協について資本構成、原料繭調達、工場経営の分析の三方面から分析したものである。

前述の竜水社を「大量生産型」(太物、並格、能率重点)組合製糸の典型とすれば本組合は「プレミアム稼ぎ型」(細物、高級格)工場の典型である。

1. 戦后における製糸資本構成上の特徴は、大経営なればなるほど優位である。この点は戦前と変らない。営業製糸と組合製糸との比較は決算時期の相異により貸借対照上の資本構成における優劣として論ずることは難しい。たゞ決算期の差異による影響を蒙らないとみられる固定資産の効率について云えば、営業製糸も組合製糸も殆んど甲、乙をつけ難い。各組合製糸間の個別的な比較、特に竜水社と本組合というような優秀な組合製糸間の比較では之又優劣をつけ難い。

2. 次にこの組合製糸を組織する地域農村について特に長野県と比較することによつて、この地盤農村の構成上の特長を明らかにしている。即ち日本農業の地域構造における東北型と近畿型の亜型としての長野対愛媛の対抗型を想定し長野愛媛とも1戸当り耕作規模は全国平均より小さいが長野は愛媛に比して耕作規模大く、養蚕、果樹経営など100%商品化作物の導入を主体としながらもなお且労働制約的経営多角化の方向(豆類、キャベツ栽培等)に乗り出さざるを得なかつた。之に対して愛媛は耕作規模はより小であるが、作付面積比率としては水田耕作経営の比重も高く、養蚕経営より効率の高い柑橘経営をもっている。更にここでは西日本＝裸麦水田裏作方式が可能であり、一口にその特徴を云えばプレミアム稼ぎ型経営をもうべき先進商業的農業地帯型をなしている。養蚕経営は愛媛に於ては県内の一定地域に偏在しているが、この点も長野とは異なる。このことは基本的には両県における生産力階層の相異、即ち長野における生産力担当階層は自小作中農層であるのに対し愛媛のそれは自作中農層にあることによるものと思われる。
3. 経営の成績は優良であることは原料繭調達、地盤確保の優良性に負うところが多い。その優位性は次の二つの条件によるのである。

(1) 養蚕農民に対する繭代金その他経済的条件が極めてすぐれている。それができるのは組合製糸という機構にもよるが、経営が優良で製糸利潤を多額に得ている。それは又良質繭を用いて高級格生糸の生産を行い、蚕種や製糸技術

は郡是直系の技術を入れ、金融にめぐまれていること及びこれらを実行しうる組合製糸指導の能力にめぐまれていることによる。

(2) 地盤町村との人的、機制的結合によつて(1)の条件を補強バックアップしている。

4. 組合製糸労働力の編制、統轄は賃銀として集中的に表現される賃銀政策については先づ賃金分布をみると竜水、本組合共に低額層が圧倒的に多く所謂ジブラ型ではない。これは能率給の賃銀等級制の表現である。両者の賃銀分布曲線は何れも双峰分布をなすが、R社の場合は前後に大きく裾を引く山は第2番目の山(日給190円--200円を頂点とする山)だけであるが、本組合は二つとも前後に大きく裾を引き第1の山の方が大きい。R社の場合第1の山は養成工(養成期間の6ヶ月は日給釘付け)が入るためであり、之を度外すればむしろ正規分布の型に近い。本組合は調査時に養成工を含んでおらないので、明らかにR社と異なる双峰分布をなす。これはR社の場合繰目本位、超能率主義的经营管理の方針から出ており、(基本給40%, 能率給60%, 能率給は仕事高60%系歩20%, 品位20%の割合である)之に対し本組合は、基本給と能率給の割合は変らないが、能率給の算定を仕事高、系歩、品位を全じ比重におく謂はば高級格品質中心の経営管理におくことの相異である。

5. 生糸生産費の構成中最も重要な要素は、原料繭費、労務費、支払利子の三つである。(支払利子は正確に云えば生産費項目をなさないが、こゝでは慣例に従っている)資本の構成高度化や生産能率の向上の問題から云えば、生産項目中

最も重要なものは労務費比率である。この組合の労働生産性は25年以降高まっている。R社の労務費比率6%台に対して本組合9%台で、これは大量経済生産方式と高級格生産方式の相異である。

支払利子は4.3%であり、以上三つを合計すれば94%にも達する。(23生糸年度)加工販売費(28生糸年度)は66,500円R社赤穂工場58,900円であるが、21A格に換算すれば39,000円に及び47,000円となり本組合の低位性を知ることができる。

6. この組合の工場長は工場の成績を左右する三つの要因を次の如くあげている。

- (1) 相場(糸価、繭価)
- (2) 経営条件(組合員の動向、原料繭事情、人的条件、設備資金)
- (3) 工場運営の適否(与えられた諸条件の下でこれに適合するような運営の方針を打ち明けることができるかどうかということ)

而してこの工場の基本的な方針は相場を追掛けることをせず経営の合理化(生産費の低減)によつて経営の成果を高めるといふ謂は、産業資本家としての本道を歩むことを目標としている。

7. 斯くてこの組合製糸は経営の一層の合理化のために自動繅糸機の導入に進むのである。

戦后における組合製糸経営の研究について私の手に入つた主要なものについて見たが、この外公表されておらないものとして協同組合製糸協会調査に係る資料に若干のものがあつた。

蚕糸・繊維科学の最近の研究

……… 学術雑誌よりの抄録紹介 ………

繊維化学

精練羊毛及び羊毛トツプ中の脂肪質の定量

T. Green, R. P. Harker and

F. O. Howitt; J. Text. Inst. 47, 110 (1956)

精練羊毛、カードスライバー及びトツプ等の残脂量、石鹼分、遊離脂肪酸の定量をエーテル、エタノール、メタノールベンゼン(3:2)混合物及び塩化メチレンを用いて比較検討し、更にソックスレー抽出法と、Wool Industries Research Associationの塩化メチレンを用いる迅速抽出法による結果を比較した。その結果を要約すれば次の通りである。

(1) 70% R. H. で給湿した羊毛の方が絶対乾燥したものよりも抽出され易い。(2) コーミングオイルのような油はエーテル或は塩化メチレンでよく抽出される。(3) エーテル或は塩化メチレンによる抽出は脂肪量の正確な値を示さないしエーテル次にアルコール抽出も石鹼分の正確な値を示さない。(4) エタノール抽出はエーテル-エタノール抽出と略同様な結果をうる。(5) 迅速抽出とエーテル抽出とは全抽出量においてかなり一致する。(6) 羊毛中の脂肪質の完全にして精確な分析はベンゼン-メタノール混合物によるのが最もよい。石鹼分及び遊離脂肪酸は常法により、全抽出量からこれら2者を差引けばグリース量となる。(清水)

染料及び染色化学

直接染料による羊毛の染色

Philadelphia section

Am. Dyestuff Repr. 44, 806 (1955)

羊毛を直接染料によつて染色することは以前からわかつていたが、従来は羊毛と綿との交織物に應用されていたにすぎなかつた。

原毛は50-56s domestic gradeを用い非イオン洗剤、ソーダ灰、メタ硫酸ソーダで精練し、4/14s番手にした。

染色には10グラムの紐を用いた。結論のみを云えば、実験に供した260種に及ぶ直接染料はPH6.0において羊毛を染色することができるし、必要ならば染料を吸尽さすことも可能である。PHを下げることによつて染色速度を大にすることができるので、これによつて染色を加減できる。しかし直接染料染色においては、同一PHにおいて染色速度を小にして均一に染色することが大切である。

Fade-ometer試験では短時間で褪色するものから100hrw, 上でも変化しないものもある。

色付試験(staining test)は、羊毛白布に対しては優秀な堅牢度を持ち、白綿布に対しては優劣さまである。しかしこの堅牢でクリーニングや家庭の洗濯には充分耐える。臭化クロームで後処理すると木綿に対する堅牢度も改善しうる染料のretentionはmilling染料よりもすぐれている。染浴中の染料の兼合は芒硝その他の助剤を加えることによつて防止できる。

従つて直接染料による羊毛染色は一考に値する。(三石)

ベ ッ ト 上 の 計 画

—記会事業にことよせて—

桐 生 義 文 (章19)

時に今度創立50周年記念事業を計画され3案を準備委員会で有力意見とした通知ありましたが、上田市に会館(例えば繊維会館)を建てる建設用地を買収すると云う様な案は出なかつたのでしょうか。

私としては示された3案は確かに良い案ではあるが50周年と云うのは今後70周年、百周年と決して独立して切離されてあるものではなくて脈々として継がるは勿論中興の祖としてあるべきぢやないかと思われるのです。

今五十周年をどれ位の予算でやられるのかは不明ですが、北大医学部の如く一人当数万円を集めると云う事は到底不可能でしょうから最低1000円として4000の卒業生で400万その他寄附を合して500万足らずの金です。

此れで会館を作るとすれば勿論土地は市の寄附に待つのでしようが北海道の例からすると随分チャチなものしか出来ないのぢやないでしょうか、適当な土地として希望するのは上田城内でしょうがあんな土地のせまい処へ然も市公会堂(これも現在の上田市としては狭すぎるんぢやないですか、それに音響効果が悪い為め音楽等の演奏会は殆ど不可能)と全じ様な、否此れよりも貧弱なものを二つ並べて作つても意味がないと思います勿論用途が違いますから一律には論ぜられませんが校内に作つ

た千曲会館を見て私達は先輩達は随分先が見えなかつたなあと思わずには居られませんからね、その為めに先般の会報にある通り階上の会議室に畳を入れてもつと有効に使用出来る様にと云う事になつたのだと思います。それですから変なチャチな繊維会館を作るなら今少し時季を待ち(後述)現在の千曲会館を高度に利用する事は如何なものでしょう。

第2項の大学として必要な研究施設等には此れは当然の事です。現在の科学界(自然科学)に於ては戦前の10年が極端に言えば1年で進歩してる様な状態にあるのぢやないでしょうか、そうすれば現在の最高研究施設は明日は既に古いものになると云う様なものですから此れは50周年だからと特別にすべきものぢやなくて母校に残つた教職員と実業界に飛立つた同窓とが常に一致協力密接なる連絡の元に一身団体となつて自分の会社の研究を母校に持つて来る様にします。丁度加美さんがやられた様に(又現在もやつてるのでしょうか)する事が肝要ぢやないでしょうか、県や国を相手の研究施設が当にならん為めに同窓会としてやると云う事は結構なアイデアであります。然して施設の設置は今后殆ど無限と云つてよいのぢやないかと思ひます。此の意味に於て私は研究施設は県、国を動かすのは勿論ですが同窓を通じ実業界とタイアップする事が第一と考えます。

第3の基金を設定する、と云う事も甚だ結構な事です。今直ぐ果して急に必要か、今迄50年間何もなかつたものが今

直ぐ必ず作らなければならないか、もう10年待つて頂いて60周年に設定して頂いたらどんなものだろうか。10年といつてもすぐです。そこで私の案をお聞き願ひます。

(1) 繊維会館建設用地を買収する

今后日本の土地は益々狭くなり御多聞に洩れず上田も土地が沸底してるだろうと思ひます。然し今後10年20年先を考えた場合、尚沸底するのは勿論の事その上校内に建物が増える事は論を待ちません。

先輩が苦勞して植えた立木も桑園も懐しいテニスコートもみんなつぶされて場末の裏長屋の様なチャチな建物(少し極言しますがお許し下さい)のみがゴチャゴチャ立つのは忍びません。やはり学園は学園らしくコンモリした林の中にポツンポツンと研究施設がある、その環境にこそ人材が養成されるんぢやないでしょうか。

それで50~60坪 2階建のチャチな木造会館をゴチャゴチャした処に作るよりは先づ第1期として此の建設用地(勿論将来必ずしも繊維会館を建てなくとも)を母校の裏から染屋街道迄の田圃に求めたら如何なものでしょう。500~600万の50

周年記念事業費が集つたら市に協力を求め地主を協賛会員にしても母校のあの辺の土地を購入したら如何なものでしょう。札幌郊外の例として約3,000坪位は取得出来ると思ひます。

此の3,000坪に桐を4坪に1本として750本植林し養蚕科学生の実習に肥培管理をせしむれば一石二鳥になるのではないでしようか。

然し10年後の60周年記念には此の半分370本余りを処分しその敷地内にバンガローを作る、此れは他府県出身の学生に無料貸与し広く人材を全国から集める

(日本アルプス)

資とする、此れは全時に就職の絆となると思ひます。勿論それ等学生に桐樹の肥培管理にもあたらせる。此の60周年で前述の基金を集め海外派遣並に国内留学資金を作つても決して遅くないし又学生の無料宿泊所と相俟つてより効果的になると思ひます。

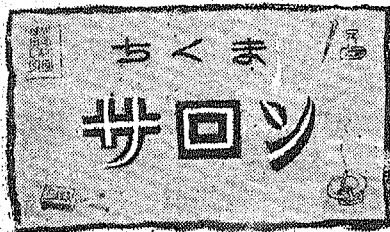
註 現在の物価を基準として370本余りの桐樹は約100万
此れでバンガロー25個を作り50名の学生を收容する。

然して70周年に全樹木の売払い代金と、卒業生(此の頃は1万名近くなる)よりの基金で1500万円位になると考えられるので鉄筋の優秀な会館が作られる。

気の長い話ですが、加美さんが生きて居られたら屹度賛成されるでしょうし、満洲に居られた湯川さん浜さん等は賛成でしょう、又全年輩では三菱化成の角田君、日本紡の松沢君京都の出野君等は賛成してくれるんぢやないでしょうか、蒲生先生や倉沢先生達も此処の宮部先生や松村松年先生の如く高遠の理想で長生きされるでしょうから母校の裏、蚕業前に鉄筋4階の繊維会館が建ち繊維の関係の資料、研究が過去現在、そして全世界のものが一堂一目で判り上田市の大行事、大演奏会等は全て繊維会館で然も先生方の孫さん方の結婚披露式は繊維会館でと云う時が来たらどんなに喜ばれるか知れません。何卒理事長始め全役員の方々に、目前にとらわれあまりチャチな事をやり悔を千才に残さん様願ひします。



雄 峰



それでも生きて来た

湯 川 秀 夫 (蚤 1)

終戦以来木から落ちた猿で不遇。会員諸兄にも無音、不義理を重ねて居る乞食。香山君が以前書いて居る如く私もミジメな引揚族の1人である。

安東から扁舟で9日間風波にもまれ仁川に上り50日目に佐世保に上陸。大枚1000円宛の引揚手当を貰った。そして「引揚者の皆様永らく御苦労様でした」とポスター丈が空々しく風にハタメイで歓迎して呉れた。

栄養失調で版を上るにも息が切れた。之が25年の在満生活の結論であつた。海外雄飛何の咎ぞ、まるで戦犯扱である。この時から私の祖国観は変つた。郷里の土地は農地法でとられ結局伊勢湾の海浜老松の下に掘立小屋を造り藻塩草を焚いて雑炊を喰つた。

封筒も買えない。駅のポスターを剥して手紙を書いた。松葉がラハハラと筵の上に落ちて来る。古障子に新聞紙を張つて詩の様なものをスタクツタ。

南風知多春 夜霧自海来
先入寓居薫 勿問零落苦
世情今不知 此处多歡語

然し窮すれば通ず、名古屋の財閥下出氏は立派な住宅を提供して下され、大同製鋼の重役は工場一棟を貸与され、又大隈鉄工の村岡会長は数10万の資金を出して下されたが土族の商法で見事磨つて仕舞つた。然し縁のない他人の真実に触れたので生きる力が湧いて来た。

○

末子の3男も引揚以来人足をして一家を支えて呉れたが家内の切望で高校に入。私もサラリーマンになつた。

3男も名大工学部に入り3年目からは私の勤先の事務所の宿直補助員の名目でアルバイトに使つて貰い「昨年春卒業し大学院に進んだが主任教授の勧めで大学院学生と全一と言う好条件で助手に就任しジェットエンジンのガスタービンの研究に専念して居り来年度からは原子炉の材料について研究をやる予定である。多

分この儘学究生活を続けて行く事と思うとして最近名大工学部某教授の娘さんと婚約成立し彼にも辛苦10年目にホノボノと春が来た感じである。これで子供に対する義務はほぼ完了した。

私も昨年名古屋の方は60の停年で辞め今は浜松保険病院の事務に勤めて居る。

○

60週の勤めで薄給だが病院と言う処は1種の技術機関で官僚的なウルササもないし医師も看護婦も若く若返りにはいい環境だ。石倉先生は老年の欠点は体の衰弱と意気の銷沈だと言われたが幸い私にはその何れも襲つて来ぬ。病院のヴァレーチームでは選手を勤め対外試合にも負けた事なく又、夏季には浜名湖に始終出掛け舟漕、釣、水泳をやつている。最近人間ドックを真似て私の体を調べて貰つたがそのデータは壮年健康者と全様で異状を認めない。免に角現在私は佐藤利一先生の生活態度に倣い度いと念願している。無論チウも衰えぬが残念ながら財政が許さぬので少時少酌と言う処だか体の為には却て良いのかも知れぬ。免に角貧乏が一番妙薬の様だ。

○

上田時代「科学は芸術也」と言う田中長太郎先生の言葉と「技術は手段だ目的は人生だ」と言われた大森須造先生の言は今以つて銘記している。思えば満洲の曠野に産業文化を残し度い併せて千曲会の発展にも尽し度いと励んだ25年は悔なき思出である。

最後に私の手がけた蒙古桑が中共政府に奨励樹種として採用された事を「昨年帰国の元大陸科学院院長志方博士より報らされたが政治と国境を超越して技術者のみが知る悦しいニュースである。それから私は「金より物、物より人」を信条として来た。第1次欧州戦争で敗けた独乙の凄惨インフレーションを知っている私は支那事変の当初数年分の必要物資を買込んで倉沢君に非国民と冷かされた事があるが終戦後これが為業に生活を支える事が出来た。

「人」については私は家族にも交友にも真実の附合をして来たと確信している。我子に対しても私は「子を持つて知る子の恩」を信条とし子供を愛しその個性の発展には身分不慮の犠牲もいとをなかつた。長男は英語が好きであつたので米國に留学させデンバー大学を只一人の日本人として卒業して来た。次男は手先が器用なので歯科を学ばせた。三男は数学

が好きなので工科をやらせた。

引揚で金と物は失つたが脚のある子供達は戻つて来た。長男は引揚で来て厚生省に入つたが英語が役に立つて先年は厚生省代表としてウィーンの世界社会保障会議に出席し歐洲各国を一巡して来た。次男は軍医学校で外科を学び満洲の陸軍病院でも外科を主としてやり口腔外科では十になつた。三男は敗戦後の苦勞と勞働で逞しい意力と体力を獲得したと言うて居る。

2人の娘も1年間の抑留生活で生死を共にし同じ釜の飯を喰べた気心の判つた青年達と結婚したからその情愛は月並の夫婦以上親子以上のものがある。

田中義磨先生は君は適応性が強いと褒めて下さつたが安東で1家6人次々と亡くなられた元満洲國立農試場長満田さんの悲運に比べれば私は家族1人欠けず引揚後も思はぬ人に援けられ又5人の子供も両親の零落に真実と同情を傾けてくれ一家族の間偽も秘密もなく明るく暮している。世紀の大悲劇に際会して「人」を対象として来た私の処世観が誤りでなかつた事をつくづく思うのである。

○

引揚以来、私の人生観、國家観は變つた。日本の政治にも愛想がついた。世相も厭はしい。私は祖国を逃避度くなくて南米渡航を計画したが、それが機縁でミイラ取りのミイラで長男の方が一足先に一昨秋日航機1番乗りでサンパウロに飛去り橋頭堡を築いている。ポルトガル語にも習熟しブラジル政府の移民局總裁に直談伴で是まで入植不許可であつたサンパウロ州内に数万町歩の移民住地の許可をとりその經營に當る事になつた。移民の導入とラミー工場の移駐を計画している。大体の見通しが付けば私達夫婦も渡航の予定である。インコやナメケモノの睡る緑の魔境に挑み、放射能の少い空氣を腹一杯吸い、豊富な果物と肉類、香り高いコーヒー、税の苦味のないビールを満喫して土を拓いて暮し度いと念願している。

畢竟私は一生夢見る男かも知れない。そして放浪性は親子2代に続いて居るから之は遺伝的問題かも知れぬ。

(1956, 6. 25)

連続セミ・ドキメンタリー随筆

— その1 —

千曲美空 (糸31)

プロハーグ

私は多分糸31回の筈だ、敢て冒頭にこんな事を書いたのは私の様に蚕糸業^{センイ}に関しては志全く意の如くならず不遇をかこつ事10数年、やつと世の中も多少落付いたらこゝ。私も又どうにか一人歩き出来る様になり、今は瀬戸物で有名な瀬戸西效その名も有名な三郷陶器の近くに御好み焼喫茶を開業、かたわら窯業原料を商つて細々と歩む、しかし心の故郷と云うのか、千曲の流れは一時も忘れ得ない、といつても糸には全く縁のない輩、学校へもほとんど疎縁になつて、俺は確か糸31回の筈だった位のところ……さて多くの同窓諸兄の中にも余の如く不遇をかこつ友も多からう。だがまあ一待て、あの山紫に水清くの信州の如く青山は到る処にあり、千曲の流れはソウソウとして七ツの大海につらなる。

友よ立ちそして一歩づつ歩こう、山の彼方の白雲に呼びかけながら……

さてこの随筆から何が飛び出すやら一応伏せて先づはしばらくの間拙筆を進めよう。



屁の話… 時將に七月盛夏、というと私が10数年前、判つきり云うと昭和16年(開戦の年)7月、養蚕実習の蚕室の大広間でクサイクサイ全く臭いと皆を困らせ、果は春ちゃん(佐藤教授)さして「これはなかなか大変な代物だ」と苦笑せしめた頃である。その屁に依つて講義が一時中断の止むなきに到る程の代物だった。「コラ!濃蛋出て行け!」と諸兄に叱られたものだ。——その頃の私は修己寮の規則正しい(珍しいと思われる人の方が多からうが)生活はまあいいとして(この年から内原精神に修練された幹部諸兄に依り、朝礼にイヤサカ——アナアツパレ——と呼んだり、自習時間があつたりしたが今となれば面白い思い出の^{アサヒル}ツである)オカラ50%の飯、一汁一菜一汁に全く腹の調子を狂してしまつたわけだ、これは勿論私だけでなく胃腸障害者は大分出た終戦前後の事を思えば未だ有難い話だが、それは又その時の事として致方なく、お茶で米をセンダクしてかき込んだものだ。私の腹はつまつた方で1週間位出ない、何とか下痢せんもんかと小使室附近の青梅や杏を拾つて食べた、甘酸ばい杏の香りのなつかしさ……飯は丼盛切りだつたが、その食器一揃を食後お茶を入れて手で洗つて飲む禅寺式はいさゝか私の屁と共にきたない思い出だ。食費は一日50銭で、その頃天井がやはり一杯50銭だつたから一応メニュー

—は御推察願う、まづいものばかりではなく、コンパとか、試験そばとか圧巻もあり未だに食欲をそそるが、いづれ又書く折もあらう。

さて余談か本題か知らないが屁はガスである、その分析は個々時々依つて多少異らうし、細部は皆さん化学を学び修めた諸兄にまかせるとして、私のオカラ蛋白質が主体、それも長時間醗酵させてある奴だから濃度の点に於てはヒゲをとらないしカロリーは相当なものだつたと思う。いはばコグがあつたわけだ。此所に化学実験を一つお目にかけ、コップを持つて風呂へ入りガスを抽出してマツチで点火したまえ、如何なる事に相成るか、但し面倒とばかり直接チャンス来れりと門前に点火にするなかれ、くれぐれも。

ウンチング、これも昨日は身の一部

今日淋しくも 別れゆくかな

秋風と共に私の腹事情も好転し左程諸兄に迷惑をかけずに済む様になつた、要は慣れと云うものですかな。



太陽族について… 世はおしなべてブームの時代、昨今は慎太郎族ブームにかつさらわれた形(併行してボナンザブームが来つた)原作を読んだ人、或いは映画とそれぞれに異つた意見も出ようどちらかといえば半太陽族的私には私なりの解釈があり、焦点はさして狂つていないつもりである。太陽の季節でたわむ^{オンナ}れに恋人を作り、たわむれに子を宿し、ある時は生めといい、後にはおろさせて死に到らしめ、葬儀の時写真に向つて香炉を投げつけ「貴方達には何もわかりやしないんだ」という返りで小説は終つてゐる。全般的にいつて氏の作品には救いがない様に見える。しかし小説作法としてはこれでいいのである、小説はあくまで大説ではない。さて氏の本当に云いたいののは簡単にいえば既成の道徳、秩序、因習、非人間的抑圧(軍隊も勿論)社会機構等々々に対する人間の反撥である、都会であれ、田舎であれ、それは同じ事である。だがこの才人はなかなか商法にたけていて世相に迎合しなくては自分も浮べれないとよく計算してあり、その觀念をセックスアピノルとブルジョア、学生、海といったものの上に流したからたまらない、それを出来るだけアグドク味をつけたわけだ。だが文学という奴はおしなべてゴウモゴウモセツクス、アピノルしなくてはいけないものか、すばらしき歴史小説よ、政治小説よ、産業小説よ出ないものか、谷崎、舟橋、石川、丹羽石坂、獅子等当代一流人の近作すべて然

り(こうした文学論になると紙数限りなきため今日は略す)

大人への、旧きものへのレジスタンスは、舟橋聖一「白い魔魚」の女主人公、竜子は盃を相手になげつける、一方は香炉を投げこちらは盃である、我々とても幾度かそうした時機に巡り合う、だが低抗ばかりしては仕事にならんし、まして遊んで食つてゆけるものではない。氣に入らなくて辞表をたたきつけるも良からう。だがそうした後で救つてくれるものは自己一人だと思ひ給え、ニコヨンしても百姓してもやつてゆくだけのフアイト、うがつた言い方でないが冷静な良識をもつて欲しい、これは私自身に言い聞かせている言葉である。太陽族の性格故にまともな就職もならず、冷飯ばかり食ひ心はヂブシーの様にさまよい歩く。計らずもそうした運命になつた人も多からう、だが私は自己に可能な限り自分で生き抜いている、烈しい自負と旺盛なるフアイトをもつて。20代にはえてして失敗が多い。30代、40代に少いのは何故か香炉を盃をば投げるも良からう、だが官職を追れたものが、翌日からは掌を返す如くかえり見られない様に、又独立独歩が如何に苦しいものであるか、とくと腕を組もうではないか、そして不幸私のように進みつつある友よ、艱難汝を将しく玉にしてくれる。太陽の明るく輝く季節は近いのだと信じて……

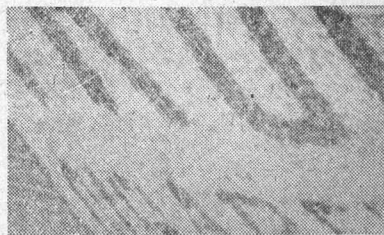
才 1 回

?これは何でしょう?

狸山君はクイズが大好き。勤務時間中にも膝の上にボナンザ・グラムをおいてそろばんをはじくほどのコリ方です。ところが今日の昼時「君、これ判るかい?」いつて1枚の写真を見せました。解答するより、出題して人の苦しむのをみてた方がいいね」なんぞといい気なものです。もちろん、ボクはこれ党ですからすぐ判りました。さて皆さんは?

(出題:天道虫)

解答締切:9月15日、正解者多数の場合には抽せんの上、3名に薄謝を呈す。送先:千曲会報編集部「これは何でしょう」係



お酒と人生

和田 晋

酒は衆の水といわれ、御酒あがらぬ神はないと言われた様に神代の時代から酒はあつた様です。而し誰が造り出したかわからないと言うのが本当らしい。

大昔も米で造つたと思われませんが、米を口で嚙んでモロミの状態にして造つたと言う説があります。酒を造る事を醸すといいますが、これは嚙むから起つたと言う事です。

奈良朝時代には麴を使う様になり、これは酒造りの上で大変な進歩でありました。

酒は神社につきものでも寺院は飲酒戒といふ禁令があるので飲むにも弊若湯などと別名をつけてゴツソリ用いたものですが、中世以後になると寺院の酒造りは大したもの奈良の様に寺の多い所では僧房酒と言うのが評判になり、奈良漬もここから始つたのだらうと言われていいます。そして徳川時代になり酒造りも進歩して、日本人に一番適した様に出来上つたのが今の清酒であります。

× × ×

此の世界で人間の住んでいる所酒の無い国はなしと言う事は、人生とアルコールは切つても切れぬ縁と言うものでしょう。「酒無くて何の己が桜かな」これは吾が国ばかりではなさそうです。御婦人の勢力盛んなアメリカで1920年(大正9年)に罪惡の根源である酒を禁止するという今思うとよくもまあと考へられる様な全米禁酒法なるものを出したのです。そしてユートピア社会を出現し様と企てた一部の狂信的な禁酒主義者の運動も一時は成功した如く見えたのですが、喜んだのは外国の酒商連、飛行機を始めあらゆる機関を動員してジャンジャン酒を運んだものです。公然とバー等で酒を飲めなくなつた愛酒家連は、こつそり家へ持ち帰つてひそかに楽しんだものである。所がこの酒を見つけた息子や女房達が御亭主の目を掠めて一寸飲んで見ると案外うまいというので、かえつて酒飲みが増加する有様、政府も密造や密輸入の取締に大汗をかいたが難に釘の有様、シカゴ

市内だけでも禁酒法を無視したモグリ酒場が1万軒以上、これ等をバツクに犯罪は増す一方。又この取締に要する費用が莫大もないもので而も年々増加するばかり、政府もとうとう音を上げてしまい、こんな事なら酒を飲んで税金を収めて貰つた方が得策だいう結論に到達、元の様に酒飲み自由たるべしという事になつたのです。

今の日本のギヤングとは桁の違う世界ギヤング史上で有名?なギヤング王、夜の大統領アル・カポーネはこの時の副産物であります。

患者よりお金がだいじと廊下の声
切れぬ注射針いやな患者へ無理にさし
選挙場知らない人におじぎされ、
はだかん坊着物持つ手につかまらず
早船も多久島まではチト遠い

はだかん坊

桐生義文

× × ×

酒も各国それぞれ特徴があり気候風土によつて内容も異つたものが出来たのは当然の事であります。ビール葡萄酒ウィスキー等皆特色があり、最近では洋酒類も相当飲まれますが吾国で一番多く飲まれるのはやはり清酒です。

良い酒は色は淡く酸味が少く肌目が細かく、よい芳香を持つており、口にふくめばトロリと何ともいえない舌触りで芳醇といふのがうまく表現した言葉です。

「良い酒は離伏見に限ると昔から言はれましたが、酒造技術の進んだ今日地方にも日本一と言われる銘酒がある。愛酒家は身近にある郷土の銘酒を発見し愛用されるといい。折角郷土に銘酒があり乍らその誇りを忘れ、徒らに離伏見の酒でなくてはならないと通ぶるのは却つて酒の通ではない」

これは国税庁醸造試験所長山田博士の言われた言葉で至言であると思ひます。皆さんの御近所にも必ずこれはうまいという御酒がありましよう。これをおさがしになる事です。

× × ×

おでん燗酒の赤のれんは左党にとつては無性に懐しいものです。日本酒といえどこの燗酒を思ふぬものはありません。中国では焼酎老酒などを温める風習があり九州南部では酒盛りといえど芋焼酎の熱いのをキューツとやる。しかし世界中どここの酒でも多くは冷のまゝであります。お燗をして飲むのは日本酒独特のものですがこれは科学的にも推賞していい飲み方です。

お燗をすると或る程度殺菌されるから衛生的です。又お燗すると冷酒より酔ひの廻り方が順調に進むから悪酔ひをしない。冷酒は廻りが遅いから十二分に注ぎ込んだ頃一度に酔いが発して、其の為め思わず酩酊して体害したり、乱に及ぶと言う事になり勝ちです。

清酒には特級一級二級酒とありますが最近全国的に特級一級酒の売行不振で、二級酒が王座を占めています。これは特一級酒の値段が高過ぎるという事と二級酒の品質が高上して一級酒に比較してそれ程差が無くなつたという事を一般の愛飲家が知つて来た事と思ひます。高い酒を飲む事は高い税金を収める事になり、政府は喜びましようが手前勘状では中々財布がゆるしません。頭の痛くなつたり目がかすむカス取焼酎が今以て飲まれるのもお酒の値段が高ばかりのせいです。酒の税金を下げてつと安いお酒を飲ませろ！これは皆さんの声ばかりでなく、吾々全国業者も政府へ談判しているのですが、酒税を下げた其の不足額の財源をどこに見付けるかと言う事で政府も頭をなやましていて、今年あたりは安くなりそうもありません。

酒類全部からの税収入と軍需費とがトントンだと言つたら、だから再軍備反対だ、これさえかくすれば酒ももつと安く飲めるんだと声が掛りそうです。

皆さんが飲み屋へ行つて出された酒をグツとやつていきなり「これはうまい、これは一級酒だろうがどこのかね」などと言わない事。案外二級酒がうまい飲めて、飲み屋では二級酒を出しておいたのが一級酒とほめられたので其のまま一級酒の御値段で御会計をと言う事になります。(次号継続)

(系12 和田電酒造KK社長)

会 費 領 收

(8月15日現在)

昭和31年度会費納入者

林 貞三(糸 3)
 荻 原 清 治(糸 12)
 中 島 通 録(糸 16)
 山 崎 菅 録(糸 19)
 白 井 美 明(糸 20)
 青 沼 茂 博(糸 32)
 石 川 新太郎(紡 2)
 野 口 尚 一(糸 8)
 小 林 伊 平(糸 17)
 阿 久 藤 恒 雄(糸 20)
 遠 土 一之瀬 匡 興(糸 26)
 北 条 舒 正(化 1)
 今 井 甲 子男(化 4)
 木 藤 半 平(糸 6)
 池 田 忠 夫(糸 9)
 清 水 石 中 賢(糸 2)
 三 田 沢 幸 男(糸 4)
 柳 美 津 利 正(紡 専)
 矢 彦 沢 充 江(化 大 1)
 松 橋 山 定(糸 別 2)
 小 堀 内 波 子(教 養 6)
 柳 沢 木 夫(化 4)
 伊 藤 村 宏(化 大 2)
 北 都 築 治(糸 20)
 竹 内 方 栄(紡 9)
 木 村 正 美(糸 26)
 三 浦 正 夫(糸 3)
 藤 島 一 省(糸 10)
 尾 藤 林 正 治(糸 大 3)
 小 金 井 節 博(糸 9)
 万 石 安 太 郎(糸 14)
 古 越 英 武(糸 8)
 堀 内 井 元 己(糸 20)
 倉 渡 健 清 一(糸 11)
 近 藤 岡 米 治(糸 19)
 羽 村 信 人(化 3)
 原 田 ま じ 七(教 養 6)
 高 田 正 氣(糸 25)
 北 沢 茂 樹(糸 16)
 宮 原 秀 人(糸 19)

未納会費納入者

金1,300円
 野 沢 司馬作(糸 13)
 是 石 春 男(糸 14)
 金900円
 高 見 沢 良 夫(化 1)

金800円
 坂 井 哲(糸 26)
 金500円
 林 久 男(農 3)
 田 中 製 漢 平(糸 28)
 金400円
 稲 富 信 一(専 修)
 宇 根 山 哲 夫(糸 17)
 林 邦 治(糸 30)
 村 田 由 一(糸 18)
 矢 田 卓 也(糸 大 1)
 依 田 達 郎(化 7)
 小 宮 山 太 助(糸 8)
 大 山 融 美(糸 22)
 藤 柳 朋 美 晋(糸 37)
 金200円
 綿 田 英 敏(糸 32)
 西 田 正 郎(糸 21)
 竹 内 藤 正(糸 大 3)
 佐 井 節 博(糸 15)
 角 井 越 夫(糸 2)
 大 泉 英 明(農 2)
 宇 治 義 春(紡 7)
 田 中 四 郎(糸 19)
 土 谷 博 士(紡 30)
 水 野 方 邦(化 2)
 茅 野 記 念 雄(糸 8)
 瀬 在 製 漢 一(糸 5)
 阿 部 和 秀(糸 13)
 門 田 秀 太 郎(糸 10)
 榎 内 明 二(糸 23)
 土 生 珀 二(糸 24)
 中 若 村 甲 子男(糸 92)
 若 岩 功 雄(糸 22)
 足 立 和 雄(糸 30)
 鈴 木 俊 夫(糸 24)
 金150円
 遠 藤 文 平(糸 1)
 金1,300円
 緑 川 栄 一(糸 30)
 金1,100円
 古 越 光 明(糸 14)
 金1,000円
 万 石 安 太 郎(糸 9)
 金900円
 町 田 博(紡 21)
 松 尾 介 石(化 3)
 土 屋 貢 一(糸 2)
 西 沢 寛 夫(糸 7)
 金800円
 山 崎 光 壽(化 9)
 馬 場 達 慎(糸 7)
 池 田 達 男(紡 29)
 金600円
 勅使河原 保(糸 8)
 柳 波 子代茂(化 2)

特別活動資金寄附者

(8月15日現在)

金2,400円
 松 林 季 美(糸 1)
 金1,800円
 高 木 三 治(糸 3)
 金1,500円
 湯 沢 重 敬(糸 5)
 宮 前 邦 雄(糸 12)
 金1,200円
 羽 村 信 人(化 3)
 金1,000円
 宮 沢 勇(糸 13)
 金900円
 横 沢 正 雄(糸 23)
 万 石 安 太 郎(糸 9)
 小 竹 平 内 好 雄(糸 13)
 小 宮 川 十 三 郎(糸 20)
 福 地 進 忠(糸 20)
 奥 村 忠 治(糸 23)
 堀 倉 元 隆 太(糸 20)
 荒 木 喬 治(糸 21)
 金800円
 都 築 清 治(糸 20)
 竹 方 栄(紡 9)
 金750円
 岩 本 賢 治(糸 21)
 金600円
 小 泉 辰 雄(糸 24)
 内 藤 良 集(糸 14)
 清水 良 一(糸 25)
 中 島 睦 男(糸 30)
 渡 辺 健 二(糸 28)
 近 藤 清 一(糸 11)
 高 門 治 治(糸 19)
 田 岡 勇 一(糸 15)
 高 田 正 氣(糸 25)
 金500円
 滝 沢 英 一(糸 大 2)
 金300円
 山 崎 睦 夫(糸 3)
 細 田 増 郎(糸 30)
 木 村 正 美(糸 26)
 望 月 政 明(糸 31)
 金 沢 昭 三 郎(糸 35)
 中 正 己 次(糸 23)
 佐 藤 藤 林 小 一 郎(糸 34)
 小 伊 倉 健 二(糸 35)
 高 橋 威 威(糸 35)
 田 沢 四 郎(糸 33)
 土 屋 拓 丈(糸 大 1)
 柳 沢 義 之 次(糸 35)
 宮 久 吉 久(糸 32)
 久 保 田 信 明(糸 33)
 吉 村 公 明(糸 32)
 篠 原 定 雄(糸 34)
 石 谷 雄 一(糸 33)

佐藤(利)春兩先生
退官記念資金受領中

間報告(2) 8月15日現在)

佐藤利一先生分

金1000円
 佐 藤 国 一(糸 4)
 荻 原 幸 胤(糸 10)
 太 田 慎 一郎(糸 6)
 金600円
 三 輪 貞 德(糸 13)
 坂 口 文 吾(糸 34)
 鈴 木 正 一郎(糸 22)
 武 本 本 治(糸 13)
 金500円
 橋 詰 英 雄(紡 4)
 井 沢 喜 三(糸 16)
 中 田 大 郎(糸 7)
 桜 井 吉 利(糸 6)
 金 沢 勇 一(糸 17)
 平 尾 孝 平(糸 19)
 宮 沢 勇 一(糸 13)
 金400円
 宮 城 博(糸 13)
 若 林 茂 省(糸 12)
 尾 藤 省 三(糸 10)
 金300円
 西 原 淳 一(糸 17)
 細 川 俊 雄(糸 18)
 古 川 正 喜(糸 18)
 横 沢 正 雄(糸 23)
 山 部 金 三 郎(糸 30)

佐藤春太郎先生分

金1000円
 佐 藤 国 一(糸 4)
 荻 原 幸 胤(糸 10)
 太 田 慎 一郎(糸 6)
 金600円
 三 輪 貞 德(糸 13)
 坂 口 文 吾(糸 34)
 鈴 木 正 一郎(糸 22)
 武 本 本 治(糸 13)
 金500円
 井 沢 喜 三(糸 16)
 橋 詰 英 雄(紡 4)
 中 田 大 郎(糸 7)
 桜 井 吉 利(糸 6)
 金 沢 勇 一(糸 17)
 平 尾 孝 平(糸 19)
 宮 沢 勇 一(糸 13)
 金400円
 宮 城 博(糸 13)
 尾 藤 省 三(糸 10)
 金300円
 川 合 久 平(紡 19)
 西 原 淳 一(糸 17)
 細 川 俊 雄(糸 18)
 古 川 正 喜(糸 18)
 横 沢 正 雄(糸 23)

住 所 移 動

頁 数	氏 名	卒業回数	新 住 所
65	唐 沢 正 平	蚕 2	社団法人アジア協会蚕糸業委員会幹事長
105	中 村 庄 司	学化 2	小諸西中学校(小諸市)(住)上田市丸堀
106	山 口 好 古	糸 30	(住) 北佐久郡御代田村
108	清 水 岩 雄	化 2	野沢中学校(野沢町)
108	五十嵐 邦 友	蚕 38	上田市立第二中学校(上田市新参町)
117	那須野 博 人	糸 30	琴光堂(上田市海野町)
122	大 平 暁	学蚕 2	繊維化学科会田研究室
126	岩 下 竜 也	蚕 18	丸子実業高校
126	岩 瀬 よみ子	教 5	(住) 小県郡豊里村林之郷
131	竹 内 義 広	糸大 2	上田ガス株式会社(住)坂城町南条5990
140	近 藤 久 子	教 6	(住) 更級郡篠ノ井町五明36
141	広 瀬 幸 男	蚕 31	通明中学校(篠ノ井町)
142	吉 沢 直 葵	学糸 4	日絹製糸株式会社(篠ノ井町)
143	工 藤 栄 治	蚕 27	蚕種協同組合千曲社(埴生町)
145	宮 崎 秋 雄	蚕 15	原松代製糸(松代町)
145	宮 下 寛 子	学化 3	中之条中学校(坂城町中之条)
245	柳 沢 みや子	旧 教	(住) 戸倉野岩宮256
147	成 雄	蚕別 3	蚕種共組高水社(須坂市)(住)小県郡青木村
150	佐 藤 忠 男	化 7	中野市立延徳中学校(中野市)(住)長野市小柴見40
156	福 井 昭 雄	化 8	長野県庁会計局(須坂市療養中)
158	宮 沢 孝 雄	農 1	長野県片農地部農地課
159	石 府 文 吾	蚕 15	片倉、普及団蚕種製造所(蚕玉町1548)
163	吉 田 夏 子	教 7	長野県繊維工業試験場(松本市)
166	若 林 清 忠	蚕 35	北安曇農業高校(池田町)
166	越 川 治 文	紡 23	呉羽紡績株式会社豊科工場(豊科町)
168	伊 倉 健 彦	糸 35	昭栄製糸下諏訪織物工場(下諏訪町)
171	松 大 平 昭	糸 21	昭栄製糸下諏訪工場(下諏訪町)
174	木 下 和 夫	学糸 4	(住) 下伊那郡松岡村満島
175	小 松 歳 雄	糸 33	(住) 下伊那郡青木村
175	滝 沢 甚 吾	化 6	マルケ屋株式会社(飯田市松尾町)
175	永 井 千 治	学蚕 1	飯田飛越高校(飯田市上飯田東野)
176	原 田 相 模	紡 7	長野県織物指導所(郡町)
177	池 田 千 代子	糸 25	飯田ガス株式会社
177	井 上 大 彦	糸別 4	恵南協同蚕糸株式会社(恵那郡岩村町)
181	宮 沢 正 彦	紡 21	大日本紡績、岐阜工場(岐阜市田神町)
181	和 田 定 男	学紡 3	三菱レーヨンKK、岐阜工場(岐阜市本荘)
181	柳 沢 文 人	学糸 4	恵南協同蚕糸株式会社(恵那郡岩田村)
181	宇 野 保 人	紡 24	東洋紡績、岐阜毛糸工場(岐阜市宇佐海草)
182	江 間 正 夫	学糸 4	(住) 静岡県磐田郡佐久間村
182	嘉ノ海 彦 義	蚕 31	(住) 浜名郡浜北町新原1055
182		紡 26	鐘紡静岡工場(静岡市若松町4ノ2)

本 会 日 誌

(7月分)

7月7日(土) 本部幹旋のもとに東信地区同窓教員の研究集会を母校で開催。

7月17日(木) 本部幹旋のもとに同窓教員の親睦を厚うし教育の発展を図るため東信地区千曲教育研究会の設立世話人会を母校で開催。

編 集 後 記

- いよいよ秋鳥と共に千曲会報の号をお送りします。毎月発行と決定してより今月号で6回目、今のところ原稿をお寄せ下さる方も多く、「今月号にのりと思つて待つていたのに、……」とお叱りをいただいたりしていますが、編集業務で経験あられる会員から、「これから原稿が切れて大変だ、……」と御注意もいただいています。千曲会報の編集に息切れしないよう御協力願います。
- 先月号に神林大兄より「酒談菴」の御紹介をいただきましたので早速和田竜へ車を走らせました。さてどんなお酒がカモされましたか。
- サロン開の燈火を添って大きな天道虫がやってきた。かかえてきた写真はこれまた珍妙珍奇。いわく、?これは何でせう?(第1回)皆さんの息抜きにと思つて今月号に初登場。お手許に御注意。
- 母校創立50周年記念事業に多大な関心を寄せられておりますが今月号に桐生兄より遠大な計画を披露していただきました。続いて御意見をお寄せ下さいませよう。そして本会報が何でも言つたり書いたりできる場になりますことを、皆さんの御健康と共に祈ります(木藤記)

編集理事 田口亮平、編集総務 小山長雄、編集部員 古平福紀 石川 博
今井甲子男 中原 武 土屋幾男 田中茂光 西村善次 木藤半平